SACHIHIRO Tenrikyo Sachihiro Branch-Church Izumi-shi 第25号 平成28年4月1日発行

さちひろ

天理教泉千歳分教会の広報紙
1面・みんなの教理入門(4)
2面・幸せを届ける音楽
3面・連載・おさしづの点描
4面・教会の動き・信奉後記

発行：天理教泉千歳分教会　〒595-0021　大阪府泉佐野市中庄1-1133　℡072-365-2571
E-mail:wat@sachihiro.com　url http://sachihiro.com　信奉者発行人・山口　凌

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

「みんなの教理入門」連載・4　心をきれいに《ほこり》

天理大学名誉教授・芹澤　茂

身上（病気）や事情（災難など）は親神様のてびき（手引き、お導き）であると教えられている。心違いをしている、すなわち、天理にもとる（逆らう）ような心づかいをしているために将来"こわい・あぶない道"に行ってしまうのを見かねて、親神様が警告しているということである。

身上や事情になったら、今迄の考え方、生活の仕方を反省しなければならない。

この間違った心づかいを反省しやすいように、「ほこり」（埃）という言葉で教えられている。

ほこりには八つある。

をしい　（惜しい）
ほしい　（欲しい）
にくい　（憎い）
かわい　（かわいい）
うらみ　（恨）
はらだち　（腹立）
よく　（欲）
こうまん　（高慢）

この心づかいはごく普通の言葉で述べられていて、その意味も言葉通りであるから、このような心づかいをしたら、いつでも"ああ、これはほこりだ"と感じなければならないものである。

しかし現用を言えば、惜しいという心がなければ物を大切にできないし、欲しいという心がなければ生きて行けないとも言える。惜しいといっても、何がほこりなのか問題になる。それ故、この点ははっきりしておかなければならない。

人間が心を働かして考えたり、言ったり、何かしたりしているときには、本来の心づかいのほかに、これに付随して余分な心づかいを必ずしている。本来の心づかいは人間らしく生きていく上に必要なことを考えているが、人間には知恵があるため必要以上の豊知恵が働いて、余分なことを考える。

例えば人に物をやる（与える）場合、やる必要があってやるのであるから、"ああ、やってよかった"と思うだけで良いが、"やりすぎたのではな

教会の動き

■朝づとめ…毎朝・6時30分
■夕づとめ…毎夕・7時00分
■春季大祭…1月21日午後1時30分
■秋季大祭…10月21日午後1時30分
■月次祭…毎月21日　午後1時30分
■春・秋季霊祭…
3月22日・9月22日　午後1時30分

※教会の場所は、左の地図の★マーク、市立公民館の東・西側です。

■全教一斉ひのきしんデー

恒例の全教一斉ひのきしんデーが実施されます。お出はそのチラシの通後です。そこに見えておりますように、4月29日（昭和の日・祝日）、わたしたちの大阪狭山市は、教会に北側に隣接する大阪狭山市戦没者慰霊碑前場がその会場です。時間は、8時30分集合。選挙の後、芸能後の開墾メッセージを代読させてもらった後、除草など作業にかかります。11時30分までの3時間、重なる汗を流しましょう。

■天理青年躍進の集い

創立90周年を記念して「天理青年一手一つ躍進の集い」が、9月18日をかわきりにグランキューブ大阪（大阪国際会議場）などで開催されます。

編集後記

▼新しい年度がはじまりました。ちょうど桜の花も満開です。▼これを作成しているきょう7日は、わたしが非常勤で教えている大学の講義の初日でした。キャンパスは慣れない新入生が、自分の行くべき教室探しにキョロキョロする光景が見られました。▼「さちひろ」第26号ができました。この号も前号同様、引用記事満載の号です。▼先日、使用しているパソコンが「トロイの木馬」にやられました。結局、システムを入れ直さざるをえない状況に追い込まれ、それにかなりの時間を費やした次第です。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご笑覧ください。http://sachihiro.com「#やまさんのブログ」から入れます。

さちひろ　第25号
信奉者発行人・山口　凌
平成28年4月1日
大阪府泉佐野市中庄1-1133番地
℡・072-365-2571

いか、とか、惜しいことをした、とか、余分なことを思うことは よくある。この余分な心づかいが、ほこりである。

心をつかえば、そのつどほこりが出るので、この点を常に反省してほこりを払わなければならない。

ほこりをそのままにしておくと、いつも同じような間違った心づかいをするようになって、本来の心づかいまで間違ってしまい、考えたり、言ったり、したりすることがみな天理にもとるものとなってしまう。

心づかいがそうなるだけでなく、その心づかいが行動にあらわれると、間違った行動をすることになる。この上うになったものは「いんねん」（因縁）と言われる。ほこりはすぐ払えば よいが、いんねんになるとなかなか簡単には払えないばかりでなく、この心や行動が種（たね）となって、今生や来世にわるい結果を生むことにもなる。

このようなほこりやいんねんが人間を苦しめているのである。そこで、この八つのほこりを反省して、きれいな心になることが大事なこととなる。

まず対人関係においては、自分の方をよくみて相手の方をわるくみてはいないか、あるいは、自分も相手も両方立つような努力をしないで、自分を守るために相手を傷つけてはいないかといった点に注目して反省すること。その他色々な問題については、このようなほこりの心づかいによって問題をみる眼がくもらされないようにすること。さらに、何事につけても、親神様を悲しませ、親神様がざんねん（残念）に思われるようなことは考えたり、したりしないようにすること。これを心掛けるようにしたい。

ほこりを反省し、ほこりを払っていけば、人間らしく生きたいという本来の心づかいはきれいなものであるから、親神様は天理によって、その願いがおのずからかなえられるように、守護されるのである。（ながざわ　しげる）

この記事は、昭和59年に「天理時報」紙に連載されたものです。

幸せを届ける言葉

高橋孝治氏「ちょっとひとこと」（幸生社刊）から

謙虚な心

私達は、ともすれば、
失敗や過失をした人を、
「あいつは才能がない」
あるいは「性格が悪い」と、
指さすことがある。
ところが、指さす手を よく見たら、
相手をさす人さし指は一本なのに、
親指がおさえる三本の指が、
「そういうあなたには、
失敗や過失はないのか」
と、逆に自分を指している。
残念ながら、
人間の一生には失敗や過失もある。
だから、まず、
人を批判する前に自分を省みる、
この謙虚な心が、
人間にとって最も大切である。

おさしづの点滴（4）

人の言う事を腹を立てる処では、腹の立てるのは心の埃み切りたとは言わん。心埃み切りたらば、人が何事言うても腹が立たぬ。それが心の埃んだんや。

（20・3・22）

心が澄む・腹がたたない

【解説】

前回掲載したお言葉と同じ「刻限御話」に含まれているものです。

「人の心は、風（親神様の働き）によって浄化される」と書きましたが、ここでは、「心が埃む」「埃み切る」と説明されています。

「心埃み切りたらば、人が何事言うても腹が立たぬ」とまで言われています。

『天理教教典』には、「心を治めて、我が身思案をなくすれば、心は、清水の如く澄んで、いかなる理もみな映る」とあります。

このお話、「みかぐらうた」十下り目に重ねて読むとわかりやすいと思います。

すなわち、人の心は、澄んでいないから親神様の真実の話がなかなかわからない（1）。そこで親神様は、「ふしぎたたすけ」をされます。人間の心づかいが親神様の働きによって、人間の目に見えるような姿・形にして現れ出るのです（2）。「腹が立つ」のは心の水の底にある泥を撹拌するするようなもの。その泥を外に出してもらいたい（3）。泥がなくなれば、水（心）を動かしても澄み切ったままです。それは「こくらく」のような「楽しみ」ばかりの世界ですよ（4）。この話は、にをいがけ・おたすけに際して、話の種・おさとしの合となります（5）、という風です。

【おさしづ全文】

明治二十年三月二十二日（陰暦二月二十八日）二時　刻限御話

さあ〳〵放って置け〳〵。誰彼をれと言うのやない。大風々々、大風は何処にあるとも知れんもの。大風というものは、どのようの大きな物でも、倒ける様れる。大風やで。風は神や。風がかりもの無うては、箱に物を入れて蓋を閉め切りた如く、底ろう上り仕様の無いもの。風がそよ〳〵あるので、半日や一日は送れるで。人の言う事を腹を立てる処では、腹の立てるのは心の埃み切りたとは言わん。心埃み切りたらば、人が何事言うても腹が立たぬ。それが心の埃んだんや。今までに教えたるは腹の立たぬよう、何も心に掛けぬよう、心埃み切る教やで。今までの俗理肥で作り上げた米が、百石貰ろたら、百石だけある間は喰て居られるゝ。今度無い世界を始めたる親に捉れて居れば、生涯末代のさづけやで。これは米に譬して一寸話してく。